

農林水産大臣賞受賞

農業と地域資源を活用した
個性とチームワークによる住民主体のむらづくり

受賞者 **加茂谷元気なまちづくり会**
(徳島県阿南市)

■ 地域の沿革と概要

阿南市は、徳島県の東部に位置し、市の面積は約 280 平方キロメートル、人口は約 7 万人である。県内一長い河川である那賀川が北部を東西に流れ、桑野川が市内を貫流する。南部には 2 級河川の福井川、椿川が流れる。各河川の下流域では平野部を形成しているが、それ以外は四方を山に囲まれた中山間地域である。気候は太平洋気候型に属し、高温多雨である。

第 1 図 位置図



農業は南部を中心に竹林が多くタケノコ生産が盛んであり、平野部の水田地帯では早場米の作付けが行われている。また、冬季は豊富な日照時間を活用して野菜、果樹、花きなどの施設園芸が盛んに行われている。

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

加茂谷地区は阿南市北西部の中山間地域に位置し、那賀川中流部の急峻な谷沿いに小規模な集落が点在しており、楠根町・深瀬町・十八り町・大井町・大田井町・細野町・水井町・加茂町・吉井町・熊谷町の 10 町で構成された地域の名称である。

神社仏閣も多く、四国八十八ヶ所参りの第 21 番札所・太龍寺があり、20 番札所・鶴林寺、22 番札所・平等

第 1 表 地区の概要

事項	内容
地区の規模	集落の集合体
地区の性格	地縁的な集団
農家率 (内訳)	40.2% 総世帯数 773戸 総農家数 311戸
専兼別農家数 (内訳)	専業農家 78戸 1種兼業農家 27戸 2種兼業農家 110戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 1,992ha 耕地面積 139ha 田 87ha 畑 14ha 樹園地 38ha 耕地率 7.0% 農家一戸当たり耕地面積 0.4ha

寺につづく歩き遍路道が保全されており、地元ボランティアのもと整備や道案内が行われている。「お遍路文化」をはじめとした独自の文化が色濃く伝えられている地域でもある。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

ア 集落機能の衰退

地域の主たる産業である農業の経営環境が悪化するに従って若者の地域外への流出が進んだ。耕作放棄地も目立ち始め、空き家の増加、児童減少により地域内の小学校が休校し1校にまで減少するなど、集落機能の維持が困難となりつつあった。

イ 集落活性化へ組織結成

このような閉塞した流れを断ち切るため地元有志らにより、子供たちが健康で心豊かな人間に育つことを願うとともに、加茂谷地区の活性化を図る目的で「加茂谷鯉祭り」が平成元年より開催されてきた。最大2千匹もの鯉のぼりを川越しに渡し、様々なイベントを開催している。



写真1 加茂谷鯉祭り

このような地元をもり立てようとする気運がさらに発展し、まちづくりのための具体的方針を模索するワークショップを開催した。回数を重ねて開催した結果、夢のあるまちづくり実行計画（アイデア10項目）を練り上げた。この目標については住民主導で取り組むこととし、特に地域の主産業である農業や地域資産としての遍路道などを活用しながら地域活性化策を検討するため、新たな組織が必要だと結論付けた。

そして、平成24年12月に「加茂谷元気なまちづくり会」が発足した。

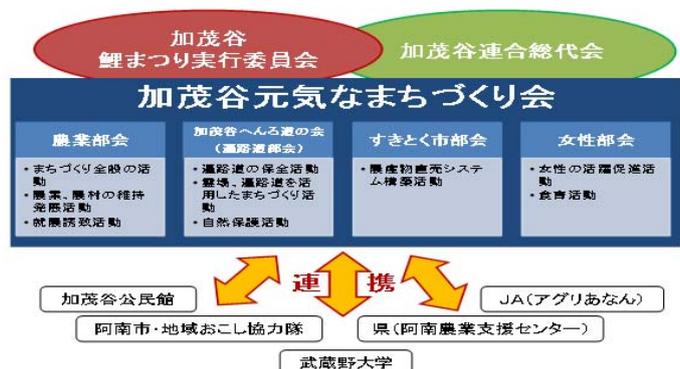
(2) むらづくりの推進体制

ア 加茂谷元気なまちづくり会の概要

加茂谷元気なまちづくり会では集落の代表（総代）や、移住・就農に係る地域の農業委員やJA生産部会長が役員として参画している。

現在、組織は「農業部

第2図 むらづくり組織体制図



会」、「遍路道部会」、「すきとく市部会」、「女性部会」から構成されており、各部会がそれぞれの目的をもって活動しつつ、加茂谷地域の元気がでるまちづくりのために思いは一致団結している。発足当時の会員数は30名であったが、平成28年には63名になっている。

イ 地域おこし協力隊、行政機関、各種団体との連携

地域おこし協力隊の誘致にも取り組み、平成28年度から2名が加茂谷地区に配属されている。ホームページ内にブログを併設し、地域に埋もれていたお宝的情報や地元住民では気づかない魅力情報を新たな視点から発信している。さらに、パソコンやインターネットを利用していない高齢者への配慮もされており、紙媒体での地域情報満載の機関誌を定期的に発行している。新たなイベントの企画運営や空き家調査などにも携わっており、まさに、加茂谷の地域おこし協力隊である。

行政機関、JAとも連携し、活用できる事業などの情報収集も行っている。平成28年度には地域で推進しているチンゲンサイ栽培の研修用ハウスの建設も行っている。

■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

- (1) 本会のむらづくり活動は、ワントップ体制ではなく、多くの個性、特技を備えたリーダーの結集で運営されている。その中には長老、若者、女性も含まれ、むらづくりのけん引主体は地域住民であり、冒頭のワークショップで作り上げた夢のあるまちづくり実行計画（アイデア10項目）はわずか3年あまりでほとんどの項目を実現している。平成28年度には徳島県優良農村集団知事表彰を受賞している。
- (2) 地域の主産業である農業を核としたむらづくりは、生産活動の向上に対する取り組みが実践的に行われており、新規就農者の誘致や高齢・女性農業者の生きがいつくりにもつながっている。そして、ベテラン農家の儲けるための技術や経験は惜しみなく公開され、新規就農者へ伝承されている。
- (3) これら前向きな活動が加速的に活性化されるきっかけとなったのは、都市大学生の大規模農業インターンシップ受入れである。もともとボランティア精神が根付いている地域であったが、この活動を機会に若者が地域に与えるエネルギーを再認識し、より地域のチームワーク力を高めることができている。
- (4) 現在、遍路道などの歴史遺産や豊かな自然環境を活かした取り組みも行われている。今後さらに、地域に眠る財産（廃校や空き家等）を活用

して、若者を中心とした移住者や八十八ヶ所霊場の巡礼者が有効利用できるような方策を検討し始めている。地域コミュニティの活性のみならず、地域外からの移住者や観光客誘致に向けてさらに飛躍する可能性をもっている。

- (5) このような本会の活動を通して、地域住民にはやる気や生きがい生まれ、訪れる人たちにはお接待の精神が伝わっている。そして、加茂谷地区が「訪れたいむら」、「住んでみたいむら」へと展開してきている。

2. 農業生産面における特徴

(1) 就農誘致活動

「農業部会」においては、平成26年度から都市部（東京・大阪）での「新・農業人フェア」に加茂谷元気なまちづくり会として出展している。加茂谷のブースでは地域住民（農家）が先導して移住就農誘致へ向けて地域をPRし、実体験に基づき農業や農村生活の良さ、そして農業で食べていくことの難しさも誠実に説明している。



写真2 新・農業人フェア

このような就農誘致活動を通じて、加茂谷地区での就農に関心を持った方に対しては「加茂谷体験ツアー」と称して、短期の農業インターンシップを実施している。ツアーの中では「加茂谷ブランド」農産物の農作業体験だけでなく、移住先の空き家、空き農地や生活インフラなどの紹介も行っている。

実際に移住就農を目指すため、2回目、3回目と必要に応じて相談会や見学・作業体験会を開催している。その結果、平成27年に30代の夫婦1組が移住して営農準備研修を開始し、翌年独立営農を開始している。また別の40代夫婦1組も移住就農を実現させている。いずれの夫婦も空き家を改装、中古ハウスを補修して暮らしている。平成29年の農業体験ツアーでは、移住就農を果たした彼らが新規就農希望者に対して農作業の実演を行い、移住就農した体験談を語った。実体験ゆえの説得力は高く、プラスの連鎖が生まれようとしている。



写真3 加茂谷体験ツアー

(2) 農産物直販活動

農業における経営環境の改善のため、農産物直販活動による6次産業化への取り組みも始めている。地元で2カ所の手作り集荷施設を設置しており、看板はインターンシップの大学生にデザインを依頼した。この集荷施設に毎日夕方配送トラックが集荷にやって来る。配送先のスーパーは現在70店舗にもおよぶ。老若男女を問わず小ロットからでも気軽に農産物の販売ができ、なおかつ中間マージンも少なく利益率を高めている。

なお、この直販活動を主体にした「すきとく市部会」を平成26年度より発足させ、売り上げの一部を本会全体の運営に充てている。平成26年度は300万円ほどの売り上げであったものが平成27年度には4,000万円あまり、平成28年度はおよそ5,300万円にまで拡大している。

(3) 都市部大学生の農業インターンシップの大規模受入れ

平成26年度から毎年、8月から9月にかけての約1か月間、東京都の武蔵野大学から合計約100名の学生を受入れ、農作業を中心にボランティア実習を行っている。初年の平成26年8月、受入れ直前に豪雨被害に遭遇したが、大学側からの「何でもお手伝いします!」という温かい申し出により、急きょ災害復旧ボランティアとして受入れることとなった。大勢の学生



写真4 学生の農業ボランティア

の助けにより、早期に農業生産活動を再生することができ、普段は寡黙な会員が涙ながらに復活宣言をしたときには感動の渦につつまれた。この先10年間は受入れを継続することで合意している。

その後の受入れは、農作業の体験を兼ねたボランティアが活動内容の主体となっている。学生の一部は農家民泊も体験し、多くの学生が「素晴らしい体験だった」と感想を述べている。学生の中には休暇を利用して、再び加茂谷を訪れ農家との再会を果たしている子らもいる。

また、秋に開催される学園祭では、今度は加茂谷の会員が東京まで出向いていき、学生との再会を果たしたり、地元農産物のPR活動を行ったりしている。

このような活動により、これまで接客的な仕事に携わることのなかった高齢農家が農作業体験プランを作り、若者への接し方の経験を深めている。そして何より、若者が地域に与える影響力は大きいと実感できており、災害や高齢化で衰退しかけていた村に活気を取り戻せることを住民たちが身にしみて経験できているところが大きな財産となっている。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 移住家族との交流

加茂谷へ移住してくる人たちの中には、IT関連のサテライトオフィス、パン職人、造園士、デザイナー、公務員など、さらには個人の趣味や特技も極めている者もいる。ここ5年ほどで10家族40人が加茂谷地区へ移り住んでいる。

山間の小さなむらである水井町においては子供が1人しかいなかった。それが、子供連れの若い3家族が移住することで、一気に子供11人とにぎやかさを取り戻している。加茂谷地区ではこれら小さな子どもや赤ちゃんを育てている親（お母さん）同士の定期的な交流会を「かもベビ」と称し、悩みごと相談や、各種アクティビティーが行われている。お母さんが孤独を感じないようにするため、また、子供同士の遊ぶ機会創出のためにも人気が高い。

移住家族と地元住民との交流や絆を深めるため、平成27年の秋から年に一度、交流イベント「かもかもフェスタ」を行い、企画運営は移住者が中心になって行っている。ダンスや音楽、トークショー、軽食コーナーや雑貨展示、ワークショップなど地域や移住者のアイデアによる手作りボランティアの総結集イベントである。

(2) 遍路道の保全整備とその魅力発信

「加茂谷へんろ道の会（遍路道部会）」は遍路道の価値を活かすため、保全整備と魅力発信の活動を先進的に取り組み、ウォーキングイベント開催、ガイド活動、広報誌の発行、マップ作成などを行っている。加茂谷地区に残る歴史的遺産、自然遺産など地域の資源を活かした取り組みにより、山歩きや自然散策の新しいスポットとして徳島県内外に認知され、多くの人々が訪れる地域になってきている。平成28年度には「とくしま環境県民会議」表彰を受賞している。さらに、「四国八十八ヶ所霊場と遍路道の世界遺産登録推進協議会」の活動でも中心的な役割を担い、四国4県の各種団体とも連携し活動している。



写真5 遍路道ウォーク

(3) 女性の参画

このような様々な活動は男性を中心とした役員らの力だけでは成し得ていない。平成26年度からは「女性部会」を発足させており、女性会員の意見も多く汲み入れるようにしている。女性部会は各部会と連携し、イベント時には軽食や加工品を提供するなどしている。子供らへの食育事業にも

積極的に取り組んでいる。また、独自に交流会や視察勉強会も実施しており、女性同士の情報交換や日頃の忙しさからの気分転換的な活動にもなっている。再び働き出すための活力源になっている。



写真6 食育活動